

各地よりのたより

倉敷通信

餘り御無沙汰ばかりして居りますので、何か書かなければいけまいと、さて筆はとつて見たもの、これと云つて別に書く程の事もないし……。時折り手紙を下さる未見の“星の友人”より“近頃何をしてられるのですか”ときかれるので、自分の近況を知らせずばなりませんまいが、さあ……と云つて頭をかかざるを得ない。“何をしてゐるか”と、あらたまつてきかれると、返答に窮する。昨年當地へ來てから、追ひ立てられる様に星を見て、無暗矢鱈に望遠鏡をふりまはしたが、昨今は、精神的にも、時間的にも、大分餘裕を生じたので、昔の様に、星を楽しみながら見、嫌な時には、早々に寢床にもぐり込むが、さて種々の事を少しやつて見ると、自分の力の足りなさが、見まいとしても大きく眼に寫つてくる。貧弱な土臺の上にはバベルの塔は立つまい。天にもとけとこの塔を建てた昔日のバベル人の如き野心はないが、せめて正しい天文の知識を得たいと思ふのが近頃の自分の願ひであつて、たゞこれのみに近頃は力を盡してゐると云つていい。初めから、何もかもやり直してゐるのです。水野先生には、昨年、その時節の話題で、通俗天文學を講演してゐたゞいてゐるが、なりの人が集まる。けれども、民衆への天文の普及といふ事は、まだまだの感がある。天文臺の參觀に來て、望遠鏡筒の中を手で探つて見て、不思議さうにしてられるのには滑稽でもあり、氣の毒でもある。第一と第三の土曜日の觀測會には、子供が澤山やつてくるが、子供と云ふものは妙に天體に惚れと魅力を感じるものらしい。今から十數年前、圖書館の一隅で“火星の運河”に不思議な魅力を持つて天文書をあさつてゐた自分の姿を思ひ出す。

天文臺の構内には、あやめの花が散つて、矢車草が咲き、芥子の薄い花びらが凡々ゆられてゐる。夜は螢が飛ぶ。早くも六月である。(15-6-3)

「和歌山星の會」發會について

從來縣下には天文團體として東亞天文協會紀伊支部があり、團體的には餘り活動してゐなかつたのですが、今春和高商に天文同好會が結成されて以來、これ等の二團體が聯絡を取つて活躍してゐます。

今回これらの會に屬する二三の者が相密つて一般の人にも加つてゐたゞいて新しい一つの團體を作り「和歌山星の會」と名付けました。

同好の方々は奮つて御参加下さい。全素人の集合です故。

「和歌山星の會」會則

1. 本會は「和歌山星の會」と稱す
1. 本會は天文趣味の普及發達及び會員相互の親睦を期す
1. 本會は縣下在住の同好者を以て組織す
1. 本會は毎月一回例會を開催す
1. 本會は會務遂行上委員3名をおく
1. 委員は會員の互選とし任期は1ケ年とす
1. 會費は必要に應じて徴集することあるべし
1. 本會は隨時講演會又は觀測會を開催す
1. 會員は相互に圖書望遠鏡の利用を乞ふことを得
1. 本會は當分下記に事務所を置く

(和歌山市金龍寺町六 野村方)

(註) 事務上委員は臨時に東亞天文協會和歌山支部員にて一時的に行ひます。

「和歌山星の會」委員 (順不同)

東亞天文協會紀伊支部員	阪	田	晃
和歌山高商天文同好會員	}	山	本 靜 雄
		島	田 音 村
東亞天文協會紀伊支部員	野	村	秋 馬

(和昭14年11月25日現在)

六月例會報告

本支部六月例會は六月17日20時より開催、小槇、野村、島田、木村、門等5名集合、2時半近く終了した。講習會開七の件は下記の條件にて行ふ豫定。

會期 八月3, 4日13時より
 會場 和歌山縣立圖書館
 講師 山本一清博士 “天文學の常識”

(2600, VI, 18. 野村記)

(第277頁より)

秩序に、無節操に、西洋の文物を取り入れて、本來の日本に生れた天然理學を全くかへりみることをしなかつた。さうして、明治12年、米人ポールが、土木の教授として來朝し、天文の講義をなしたが、當時の日本人はこれこそ渡來の新説として、よろこんでこの講義に耳を傾けたが、何ぞ計らん、江戸時代に、すでに、如上の天文の篤學者が世界に誇る新説を發表してゐたのであつた。

[廣島の一會員] (1940, 4, 8. 800 p. m.)